



日程 2025年12月13日（土）、14日（日）

時間 1日目開会 9:00～2日目 閉会 16:30

フェリー太陽Ⅱから見た屋久島

参加 オンラインは事前申し込み制、
現地会場は参加無料

会場 オンライン開催（ZOOM）
屋久島町役場フォーラム棟（小瀬田）

主催：屋久島学ソサエティ

共催：屋久島町

後援：屋久島環境文化財団、京都大学野生動物研究センター

プログラム概要

■12月13日（土）

8:30 開場

9:00 開会（会長あいさつ、古謡まつばんだ）

9:15-11:15 高校生発表

11:30-12:15 一般口頭発表

13:30-16:30 テーマセッション「屋久島における野生動物の狩猟と捕獲－過去、現在、そして未来にむけて－」

18:00 - 20:00 懇親会（安房公民館2F）

■12月14日（日）

8:30 開場

9:00-11:30 一般口頭発表

11:45-12:15 一般ポスター発表（コアタイム）

13:30-16:00 屋久島ソサエティカフェ

16:00-16:30 「洋上大学『サンゴの方舟－海の未来を繋ぐ 洋上大学－』交流イベント」の報告



第13回大会 テーマセッション1 「屋久島における野生動物の狩猟と捕獲— 過去、現在、そして未来にむけて—」

大会1日目 2025年12月13日（土） 13:30-16:30

～開催主旨～

屋久島における狩猟の記録は、最も古いもので江戸時代の楠川古文書のさかのぼる。江戸時代から現在にいたるまで屋久島ではどのような狩猟が行われてきたのか、過去数十年のあいだに大きく変貌をとげた野生動物の人間のかかわりを概観しながら、今後屋久島でどのような狩猟や捕獲が可能なのか、地域社会において狩猟や捕獲を継続していくためには、どのような視点や取り組みが重要になるのか。狩猟や捕獲に関わる猟友会のメンバーをはじめに島の人たちと、野生動物の管理の最前線で舵を取る実務家や行政の関係者、屋久島で研究を行うものたちのあいだで、現在の問題と課題を共有し、未来の青写真を描く場としたい。

オーガナイザー：服部志帆（天理大学国際学部准教授）

タイムスケジュール

13:30—13:40 趣旨説明 服部志帆

13:40-14:00 発表1 丸山哲也（栃木県林業センター特別研究員・野生動物管理学）

14:00-14:20 発表2 鈴木正嗣（岐阜大学・野生動物管理学）

14:20-14:40 発表3 大坂桃子（京都大学大学院アジアアフリカ地域研究研究科・地域研究）

14:40-15:20 発表4 服部志帆（天理大学・文化人類学）・牧瀬一郎（上屋久猟友会）

15:20-15:30 休憩

15:30-15:40 コメンテーター 本郷峻（総合地球環境学研究所・保全科学）

自由討論

16:20-16:30 総括

第13回大会テーマセッション1

発表要旨と登壇者プロフィール

「関係機関の連携による日光国立公園でのニホンジカ対策」 丸山哲也(栃木県林業センター)

平成26(2014)年に担当者レベルでの協力体制の構築を目的として、国、県、市の関係機関による「日光地域シカ対策共同体」を設立した。共同体は毎年打合せを実施し、各機関の事業計画についての情報共有を行うとともに、許認可等必要な調整を行っている。また、課題解決に向けたアイデア出しなどぎくばらんな話の中で、事業化につながるきっかけになることもある。さらに、人的協力依頼や物品の借用などは、必要に応じて適宜行っている。共同体の協力体制により、単独の機関ではなし得ないことも実現できている。



「共同体構成員による植生保護柵設置作業」

(まるやまてつや) 1990年、東京農工大学環境保護学科卒業。1991年栃木県入庁。主に環境森林部自然環境課や林業センターにおいて、鳥獣関係行政に携わる。2023年より現職。おもな著作に『とちぎの野生動物－私たちの研究のカタチ』（関・丸山・奥田・竹内編、随想舎 2016年）や「栃木県における狩猟者の意識と狩猟の実態（I）－シカ捕獲促進策に対する意識（丸山・神崎・上田、『野生鳥獣研究紀要 pp.28-33、2005）」、「栃木県シカ保護管理計画における狩猟者の役割（丸山・松田、『野生鳥獣研究紀要 pp.18-25、2004）」などがある。

「屋久島で行われている計画捕獲の意義と先進性」 鈴木正嗣(岐阜大学)

野生鳥獣の捕獲は、狩猟という語のみで一括して語られることが多い。しかし捕獲は、個人の趣味として行われる場合もあれば、生態系被害の低減など、公的な目的のもとに行われる場合もある。この実情を踏まえ、環境省は、前者を「狩猟」として、後者については「許可捕獲」等として区分している。当然のことながら両者間には、従事者に求められる知識や技術にも大きな違いがある。環境省により屋久島で行われている計画捕獲は、公的な目的のもとに行われる捕獲として、他に例を見ない地域密着型の発想と体制で運用されている。



「環境省が進めている計画捕獲（環境省九州地方環境事務所発行の『ヤクシカと生きる』から転載（タイトルをクリックすると、冊子に飛びます）」

(すずきまさつぐ) 1989年日本獣医生命科学大学 畜産学研究科 獣医学修了、北海道大学博士（獣医学）。現在、岐阜大学応用生物科学部教授および岐阜県野生動物管理推進センター長。エゾシカ協会会長。おもな著作に、『野生動物管理のための狩猟学』（梶・伊吾田・鈴木編、朝倉書店 2013年）や『野生動物と社会－人間事象からの科学』（伊吾田・上田・鈴木・山本・吉田監訳、文永堂出版 2011年）、「『有害鳥獣』と地域社会 ～よくある誤解・思い込みをひとつずつ解きながら～（『都市問題』109号、pp.77-86、2018）」、「その資源化と利活用、本当に鳥獣害対策として役立ちますか？（『農耕と園芸』71号、pp.12-16、2016）」など。

「農作物被害対策の視点から考えるニホンザル捕獲体制の課題」

大坂桃子(京都大学大学院)

屋久島では、1980年頃からニホンザルによる農作物被害が大きな問題となってきました。近年被害金額はピーク時と比べて20分の1ほどにまで減ってきましたが、集落を歩いていると、依然として「被害にあって困っている」「捕獲を増やしてほしい」という声を多く聞きます。このギャップを、被害量ではなく農家さんの被害認識の視点から捉えようと研究してきました。今回は、その中で見えてきた農作物被害対策としての捕獲の課題について議論したいと思います。



自動撮影カメラにうつったタンカンを持ち去るニホンザル

(おおさかももこ) 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程在籍。人と野生動物の関わりをテーマとし、2020年度から、屋久島でニホンザルによる農作物被害について研究してきた。2022年度からは、アフリカ・ガボン共和国にて、農村を利用するマルミミゾウ(アフリカゾウの一種)の生態調査をしている。おもな著作に、「屋久島におけるニホンザル農作物被害問題の所在一住民の被害認識に注目してー(大坂・山越・平木・半谷『霊長類研究』, pp.1-14, 2025)や「人が住む世界と野生動物が棲む世界との境界線はどうあるべきかー屋久島からガボンへー(大坂、『アジア・アフリカ地域研究』21巻1号, pp.128-131, 2021)」など。

「屋久島における狩猟および捕獲活動の変遷」

服部志帆(天理大学)、牧瀬一郎(上屋久猟友会)

古文書の記録によると、遅くとも江戸時代から屋久島では狩猟が行われており、シカやサルは食料や薬、交易品として猟師や島の人々の生活を支えてきました。しかし1960年代以降、生活の変容や禁猟政策の影響を受けて、趣味でおこなうスポーツハンティングの色合いを強め、2000年代になると、獣害をおこすシカやサルの有害捕獲が活発化しました。生活や自然環境のあり方、環境政策によって変わってきた、屋久島における狩猟や捕獲について、34年にわたって第一線で活動してきた牧瀬一郎による現場の声を紹介しながら、発表します。



半世紀前までサルを生け捕りにしていたローヤワナ

(はっとりしほ) 2008年、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科修了、京都大学博士(地域研究)。現在、天理大学国際学部准教授。自然と人間の関わりをテーマとし、カメルーンでは狩猟採集民バカを対象に、日本の屋久島では猟師を対象に研究を行っている。近年の著書に『霊長類学者川村俊蔵のフィールドノートー1950年代屋久島の猟師と後継者たち』(南方新社2021年)や『アートと人類学の共創ー空き家・もの・こと・記憶』(服部・小野・横谷編、水声社2023年)などがある。2018年に屋久島町歴史民俗資料館において「よみがえる展覧ー1950年代を生きた屋久島の猟師たち(2018年12月～2019年2月)」を企画し、今回のテーマセッションにあわせて、猟具や伝承に関する展覧会を同資料館において企画している。

(まきせいちろう)上屋久猟友会会長、ヤクニク屋代表。屋久島生まれ。狩猟歴は34年に及ぶ。2014年10月に有害鳥獣として捕獲されたヤクシカを有効活用するために、宮之浦でヤクニク屋をオープンする。環境省が2017年から実施しているシャープ・シューティングのメンバーでもある。おもな著作に、「サル二万、シカ二万、ヒト二万 屋久島のシカと森の今(手塚・牧瀬・荒田・湯本、『世界遺産をシカが喰う、シカと森の生態学(湯本・松田編、pp.189-202. 2006年 文一総合出版)』)や「ヤクシカ猟の過去と現在(牧瀬一郎、『グリーンパワー2011年10月号』、pp.6-7. 2011年 公益財団法人森林文化協会)」など。



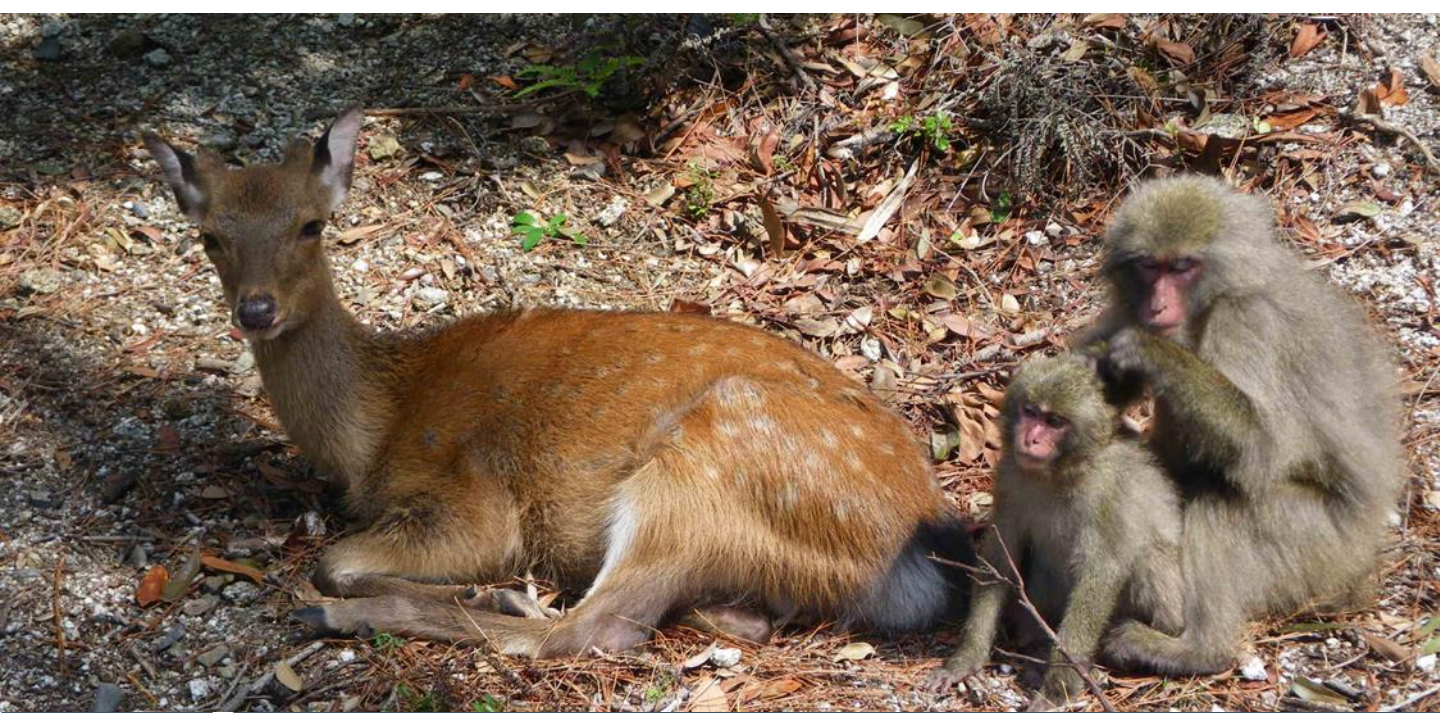
安房の森林でシカ狩りをする牧瀬
(2018年3月)

コメンテーター 本郷峻(総合地球環境学研究所)

(ほんごうしゅん) 愛知県名古屋市生まれ。2016年、京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了、博士(理学)。京都大学霊長類研究所・研究員、同アフリカ地域研究資料センター・特定研究員、国際協力機構(JICA)・長期専門家などを経て、2024年より現職において、「地域知と科学との対話による公正で持続的な狩猟マネジメント」プロジェクトを率いている。長期フィールド調査を研究の主軸とする。自動撮影カメラなど科学的手法と狩猟者の地域知とを組み合わせ、熱帯雨林地域の狩猟マネジメント法の開発に取り組む。主要な著書に、『人類の社会性の進化(Evolution of the Human Sociality)(下): 共感社会と家族の過去、現在、未来(山極・本郷 2018年 詩想舎)』、『はじめてのフィールドワーク ①アジア・アフリカの哺乳類編(田島ほか 2016年 東海大学出版部)』、監修に「動物 新訂二版(山極・本郷 2024年 講談社)」などがある。



「アマゾンの森をカヌーで上る」
場所: プエルト・ナリニョ、アマゾナス、コロンビア
撮影年月: 2023年7月
撮影者: Marlon del Aguila Guerrero



第13回大会テーマセッション2 屋久島ソサエティカフェ

大会2日目 2025年12月14日（日） 13:30-16:00

～開催趣旨～

約40年前、世界遺産登録前に実施された総合調査と、それを通じた研究者と島民の交流から、島全体を学びの場と捉える「屋久島オープンフィールドミュージアム構想」が提唱されました。この考えを具体化するため、研究者が最新の知見を島民に、島民が島での実情や実感を知見として島外の研究者に伝える、双方向・未来志向の交流の場として「屋久島学ソサエティ」が生まれました。

今回は、みんなで仲良く話せるように、『屋久島ソサエティカフェ』という形で行います。カフェでおしゃべりするみたいに、研究者の先生たちのテーブルを囲んで、気になるテーマについて自由に話したり、質問したりできます。研究のことと島のくらしをつなげて、みんなで知恵を出し合い、島の未来をよくしていくのが目的です。ぜひ、みんなの声を聞かせてください。

オーガナイザー：古賀顕司（屋久島山岳ガイド連盟 代表）

タイムスケジュール

- 13:30から13:40 趣旨説明
- 13:40から13:55 屋久島での研究者と島民の交流について（山極）
- 14:00から14:30 第1ターン
- 14:30から14:40休憩
- 14:40から15:10第2ターン
- 15:10から15:20休憩
- 15:20から15:50第3ターン
- 15:50から16:00 総括（半谷）

第13回大会テーマセッション2 屋久島ソサエティカフェ 質問コーナーの研究者

昆虫

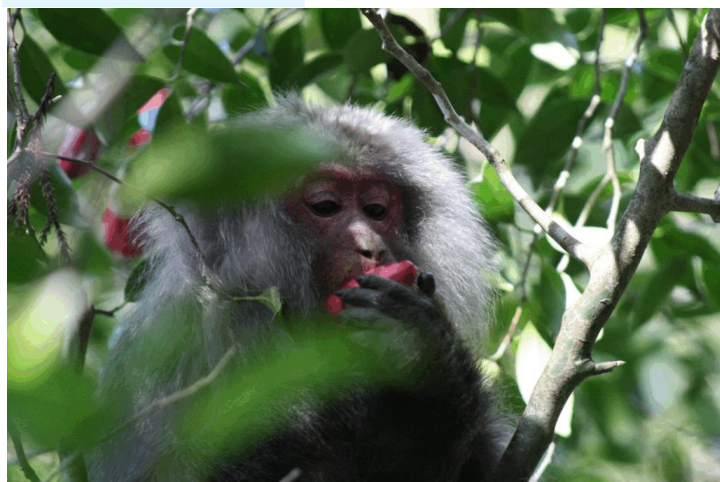
金井賢一（鹿児島県立錦江湾高校）



「鹿児島昆虫同好会で会誌の編集をしています金井です。当日は、屋久島在住の久保田義則さんと一緒に、屋久島の昆虫についてお話しします。でも、分かっていないことの方が多いんですよ！一緒に調べてみませんか？」

動物

半谷吾郎（京都大学）



「わたしの先輩たちが屋久島でサルの研究を始めてから50年。わたし自身は約30年。これだけ研究してもまだ分からないことがたくさんあります。サルやほかの生き物のふしぎについて、一緒に語り合いましょう。」

動物

揚妻芳美（Waku Doki サイエンス工房・北海道大学）



親子で一緒にあくび

屋久島でおもにシカの暮らしを調べています。シカに抱くイメージは、かわいい、厄介者、美味しそう...など、人さまざま。だからこそ、みんなで語ることで新しい謎や発見があるかもしれません。参加を待っています。

道具 (狩猟の罠、野生動物の利用)



服部志帆 (天理大学)

私は「狩り」の研究をしています。かつてシカやサル、イタチは、島の人たちにとって食べ物や道具、薬、商品で、とても大切な存在でした。実際に、角や皮に触れながら、野生動物と人間の関係がどんなふうに変わってきたか、考えましょう。

樹木・森

高嶋敦史 (琉球大学)



ヤクスギ林の継続調査に関わり始めて24年が経ちました。また近年は、照葉樹林の調査にも首をつっこみ始めています。屋久島の森の成り立ちや人々との関係について、様々な角度からお話しできたらと思っています。

樹木・森

金谷整一(森林総合研究所)



絶滅危惧種ヤクタネゴヨウの保全を中心に、森林植物の保全遺伝学を研究。大気汚染や温暖化の影響、共生菌根菌の探索、他植物の生態研究など多方面に取り組んでいます。

第13回大会 高校生発表 屋久島高校環境コース研究発表 座長:中川正二郎

大会1日目

2025年12月13日（土） 9:15-11:15

小田幸太郎 「屋久島の杉のこれまでとこれから」

久保紅葉 「分解者・ダンゴムシ」

篠原恋葉 「環境にやさしい入浴剤とは？」

日高海音 「屋久島の天気予報」

日高佑菜、松田風輝 「屋久島の集落地図をつくる」

藤山太郎、松田雷輝 「川の生き物ー淡水魚・海水魚」

村上柚風 「プランクトン」

森園晃誠 「地杉で造る家」

1130-1145

「2025年屋久島における民謡まつばんだとそのうたい手たち」 安部弥生（屋久島町民）

まつばんだがテーマとして取り上げられた2015年屋久島学ソサエティ第三回大会から10年。節目となるこの機会に、屋久島内でまつばんだがどのようにうたわれて居るのかを記録に残しておきたいと思います。

1145-1200

「屋久島での『文化』調査の再考」

荒木真歩（京都市立芸術大学・日本伝統音楽研究センター特別研究員）

発表者は2021年を中心に屋久島の楠川集落に住み込み調査をおこなった。本発表はその調査から集落内の社会を踏まえて「文化」とは何かを再考する。様々な行事等に参加した経験を提示しながら、島全体の「文化」を多くの参加者と考える機会にしたい。

1200-1215

「遊び仕事としてのイソモン採取——その商品化がもたらす海のコモンズの悲劇」 中島成久（法政大学名誉教授）

遊び仕事としてのイソモン採取は開発の時代に海の生態系も荒廃し、資源量が減った。さらに1993年の世界遺産登録により、イソモン採取が商品化した。イソモン採取は「いつでも、どこでも、だれでも」できるとされ、海のコモンズの悲劇を招いている。

1215-1230

「屋久島健康圏構想2025：新たな地域医療・介護構想について」

杉下智彦（屋久島尾之間診療所）

屋久島では、高齢化の加速や産業構造の変化により、医療・介護サービスの持続可能性が危ぶまれる状況です。人口動態や疾病変化を踏まえた地域診断や住民アンケートの結果をもとに、屋久島における医療と介護の展望についてお話しします

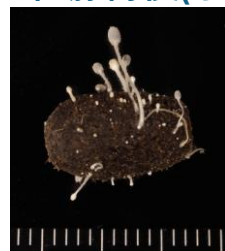


900-915

「糞生性トフンヒトヨタケ複合体の分類体系の整理に向けて」

亀田果夏（京都大学大学院人間・環境学研究科修士1年） 佐藤博俊（京都大学大学院人間・環境学研究科教員）

発表者は屋久島を中心に行った全国的な調査から、糞生菌（動物の糞から発生する菌類）であるトフンヒトヨタケは複数の種に分かれる可能性が高いことを確認しました。この研究の進捗状況についてお話しします。



915-930 *ZOOM発表

「ヤクザルのキノコ食行動について」

大沼明日佳（金沢大学自然科学研究科修士2年）

ヤクザルは多種類のキノコを食べるが、どうやって毒キノコを回避しているのだろうか。本研究では、サルが食べる・食べないをどう判断しているのか、その基準の解明を試みた。

930-945

「ヤクシマザル特有の非母親による乳児扱い」

Lee Boyun（イ ボユン）（総合研究大学院大学 JSPS外国人特別研究員）

霊長類は他個体の乳児に関心を示す。ヤクシマザルも例外ではないが、その関心の示し方には他種と異なる特徴がある。本研究では、ヤクシマザルの社会的欲求と制約が乳児への扱いにどのように反映されているのかに焦点を当て、その固有性を探る。



945-1000

「サルによる食害がツバキの結実に与える影響」

角田史也（京大大学生態学研究センター博士1年）、佐竹まどか（宇都宮大学）、亀田果夏（京都大学）、仲渡千宙（広島大学）、手塚詩織（東京農工大学）、金原蓮太郎（京都大学）、南川未来（京都大学）、榊原未桜（京都大学）、Negin Eslamibidgoli（京都大学）、柴田尚輝（京都大学）、伊勢上さくら（東京理科大学）、福田滯李（東京農業大学）、半谷吾郎（京都大学）

スギ林に生息するサルは、ツバキの開花期に花を大量に破壊して中の蜜を食べる。本発表では、サルによる花の破壊がツバキの結実に与える負の影響について調査した途中結果を報告する。



1000-1015

「ハナヤマツルリンドウの「驚きの」送粉者」

長谷川匡弘（大阪市立自然史博物館）

私は屋久島高地に固有の植物について、主にどのような動物が花粉を運んでいるかということを調査している。今回はハナヤマツルリンドウの調査結果（中間報告）について報告する。

1015-1030 ZOOM発表

「ヤマモモの生活史特性」

渡邊 彩音（名古屋大学大学院 生命農学研究科 博士2年）、中川 弥智子 名古屋大学大学院 生命農学研究科

ヤマモモは、屋久島の低地照葉樹林の主要な林冠構成種の1つです。今回は、ヤマモモの種子散布を調べるにあたって収集した、実生動態や性比などの生活史特性に関するデータをまとめたのでご紹介します。



1030-1045

「屋久島内におけるサツキの形態の比較」

遠藤翼（新潟大・農・4年）、阿部晴恵（新潟大佐渡自然共生科学センター）・川西基博（鹿児島大学・教）・崎尾均（新潟大佐渡自然共生科学センター）

溪流植物とされるサツキは屋久島に隔離分布し、山頂部にも生育する。本研究では、島内の溪流域と山頂域などの集団間の葉形態を比較し、生育環境との関係を考察する。

1100-1115 ZOOM発表

「河川の勾配は魚類の種構成を決定する」

熊井勇介（独立行政法人 水産研究・教育機構）、宮正樹（早稲田大学大学院 ナノ・ライフ創新研究機構）、佐土哲也（千葉県立中央博物館）、黒木真理・山川卓・小林龍史（東京大学大学院農学生命科学研究科）

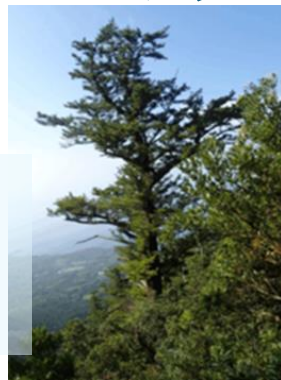
河川によって魚類の種構成が異なる要因は何か？ 環境条件の異なる屋久島の10河川において、河川水中に存在する「環境DNA」により生息種を調べた結果、河川勾配が、ハゼやウナギなど一生の間に海と川を行き来する魚類の種構成に影響することがわかった。

1115-1130

「絶滅危惧種ヤクタネゴヨウの衰退－30年間のモニタリング結果から－」

金谷整一(森林総合研究所九州支所)、手塚賢至(屋久島・ヤクタネゴヨウ調査隊)、池亀寛治(種子島・ヤクタネゴヨウ保全の会)

屋久島及び種子島にのみ自生する絶滅危惧種ヤクタネゴヨウの適切な保全のため、個体群動態や衰退要因等の解明が重要かつ急務である。本報告では、両島の各地に設置した調査地のモニタリング結果から、今後の保全策について議論する。



1130-1145

「屋久島憲章について」

田村利久(屋久島高校 2年)

屋久島には屋久島憲章という、屋久島の理想の姿を示し、そこに向かう姿勢が定められた憲章が存在しますが、現在よりも更に活用の余地があったり、知名度を増やしたりできると考え、スライドにまとめました。

第13回大会ポスター発表

12/14 (日) 11:45-12:15 コアタイム

ポスター 1

「屋久島における狩猟と犬たち－1950年代から現在にかけての変容と課題を考える」

服部志帆(天理大学国際学部教員)

若松大介(屋久島犬保存会)

本発表では、文献による記録や聞き取りをもとに、屋久島における猟犬と人間のかかわりに注目しながら、1950年代から現在にかけて狩猟がどのように変わってきたのかを明らかにし、現在、狩猟者と猟犬が抱えている課題を考えたい。



ポスター 2

「屋久島犬の島外流出と交雑の歴史—狩猟雑誌の分析から」

永網未歩（屋久島犬保存会）

若松大介（屋久島犬保存会）

戦後屋久島犬はその猟能の高さから全国の猟師のあいだで大きな人気を博した。15～30年前の狩猟雑誌の分析を、島内で聞き取りをもとに作成した系統図を用いて行い、島外への流出と交雑がすすんだ歴史を検討したい。



ポスター 3

「サル研究者が撮影した1970-80年代の屋久島」

半谷吾郎（京都大学生態学研究センター教員）。

屋久島でのサルの研究は、1970年代に本格的に開始しました。そこで中心的な役割を果たした丸橋珠樹さんから、当時の屋久島の写真をお借りしましたのでご紹介します。未舗装の西部林道、森林伐採の様子など、今では貴重な記録が含まれています



ポスター4

「屋久島の山々を流れる水の違い—前岳と奥岳の比較—」

篠塚賢一（岐阜大学）、永淵修（福岡工業大学）、中澤暦（富山県立大学）、手塚賢至（屋久島環境科学研究所）

屋久島では、海岸近くの前岳と内陸の奥岳から流れる溪流が異なる流域環境を示す。本研究では2023～2025年の5回の調査を通じて、両者の水質特性の違いを報告する

ポスター 5

「食肉処理方法の改良—屋久鹿ジビエ王国の事例—」

佐々木大和（株式会社屋久鹿ジビエ王国）

ジビエ産業では、食肉としての質の向上に関する議論がいまだ発展途上である。屋久鹿肉を専門に扱うジビエ王国での実践をもとに、止め刺しや熟成などに着目し、適切な食肉処理方法のあり方について検討した。

ポスター 6

「一湊川に生息するヤクシマカワゴロモの環境変化に対する脆弱性について」

永淵修（福岡工業大学）、北渕浩之（滋賀県立大学）、中澤暦（富山県立大学）、篠塚賢一（岐阜大学）、鮎川和泰（島根大学、環境システム）、田辺雅博（日科機バイオス（株））、手塚賢至（屋久島照葉樹林ネットワーク）、手塚田津子（屋久島照葉樹林ネットワーク）

一湊川に生息するヤクシマカワゴロモが流域の一時的な変化によってもその群落の衰退を加速させる。ここでは、ヤクシマカワゴロモの存続を規定する環境閾値を過去の調査結果から推測する。

報告 —サンゴの方舟—

12月14日(日) 16:00-16:30

喜界島サンゴ礁科学研究所が企画した「サンゴの方舟」プロジェクトを屋久島で受け入れました。その一連の取り組みを報告します。

手塚賢至（屋久島学ソサエティ 事務局）

09.16 喜界島出港・09.18 屋久島寄港予定！
7:00入港・13:00出港予定。



航海期間：2025年9月16日(火)～9月23日(火・祝)

航海：喜界島→屋久島→高知県電→瀬戸内→大阪

9月18日(木)7時-13時に
宮之浦港火之上山埠頭(新港)
にて停泊予定。

乗船体験イベント開催！
誰でも参加OK！！

帆船がやってくる！科学×アート×次世代の船

9/18(木)朝7時入港！宮之浦港火之上山埠頭(新港)
「帆船 BLUE OCEAN miraiへ」乗船体験イベント開催予定。

2025年9月、喜界島から出発した帆船「みらいへ」が屋久島にやってきました！！
科学者、アーティスト、そして未来を担う若者を乗せた帆船が、屋久島に寄港します。
喜界島と屋久島の文化交流を予定しています！たくさんのご参加と応援をいただくと幸いです！！

後援：屋久島町

090-4094-0528（NPO法人うお泊屋久島・管川）
0997-44-2965（屋久島学ソサエティ：手塚）

応援する
プロジェクトの発展のため、クラウドファンディングを実施しています。研究費やアーティスト、船乗らとともに
制作したプロジェクトに参加していただく方、船乗らの中にもってプロジェクトの実現をサポートしていただく方を
探しています。喜界島の美しい海やそこに暮らす人々を知りたい方に、ぜひご支援をお願いいたします！！

帆船 BLUE OCEAN miraiへ
ゼリ・ジャパンが所有する、「帆船 BLUE OCEAN miraiへ」は一般の方が自由に乗船できる日本で唯一の大型帆船です。3本マストのト
ップスルスクーターで、船体は全長40m、幅員は10m、吃水は1.5m、総重量は130t、総重量は130t、総重量は130t、総重量は130t、
トの重さは全長40m、幅員は10m、吃水は1.5m、総重量は130t、総重量は130t、総重量は130t、総重量は130t、